

人空羽衣遠

12

ポーランド点描新聞
日本文化再発見特集

親日感情の背景

ポーランドの人々が抱く親日感情の背景には、三つの大きな歴史的事件が関係していました。

① 日露戦争の勝利

日露戦争（1904～1905）は日本がロシア帝国を相手に戦って勝利した戦争ですが、この戦争を機にポーランドの親日感情が一気に高まりました。この頃、ポーランドはロシアとプロシヤに分割され、地図上にはポーランドという国はありませんでした。当時極東の一小国に過ぎなかった日本が、超大国帝政ロシアを相手に互角に戦い、そして勝利したことは、ロシアに長年支配され続けていたポーランドの人々に強い衝撃を与え、自由と独立への希望がめばえたのです。更に、ロシア軍の前線には多くのポーランド人が兵士として送り込まれていました。日本軍は捕虜としたが、これらの人々をきわめて人道的に扱いました。日本人の「武士道精神」としてポーランドの人々に語り継がれています。



② シベリア孤児の救出

大正時代の日本は世界に誇れる素晴らしいことをしていました。1920年からのシベリア孤児救出です。当時のポーランドは帝政ロシアの支配下にあり、多くの人が政治犯として家族とともに極寒のシベリアに流されていきました。第一次世界大戦が終わり、ポーランドはようやく自立を回復しましたが、ロシア革命の混乱の中で十数万人のポーランド人がシベリアに取り残されてしまいました。特に、親を失った子供たちは、飢餓や伝染病で衰弱するなど悲惨な状況でした。ポーランドの新政府は、せめて子供たちだけでも



祖国に連れ戻りたいと求め、最後は日本へ拒否され、最後は日本へ援手を得た。この救出は、ポーランドの人々にとって大きな歴史的事件です。日本は、孤児たちの救出に手厚く保護し、本国に帰る日、孤児たちは医師、看護師、近所の人々の首にしがみつき、泣いて離れようとしなかったそうです。当時の孤児は後年、天国みたこの「日本は困った」と話して

我々は日本の恩を忘れない

シベリア孤児救済の話は、当時ポーランド国内ではかなり広く紹介され、ポーランド政府や関係者から沢山の感謝状が届けられました。その中の一つ、「極東委員会」の副会長として、自らシベリアの奥地をポーランドの孤児たちを捜し求め、駆けつけ、回ったヤクブ・ウイッチ医師は、

「ポーランド国民の感激、われらは日本の恩を忘れない」と題した礼状の中で次のように述べています。



「日本人はポーランドから遠く異人種である。しかし、不運なポーランドの児童にあのようになく、同情を寄せ、心から憐憫の情を

表わしてくれた以上、我々ポーランド人は肝に銘じてその恩を忘れることはない。孤児たちを見舞いに来た裕福な日本の子供が、孤児たちの服装の整ったのを見て、自分たちの着ていた最も綺麗な衣服を与えようとした。髪に結ったリボン、櫛、飾り帯までとってポーランドの子供たちに与えようとした。二度ではなかった。

『善意の架け橋』兵藤長雄

『世界はこれほど日本が好き』河添恵子



「ポーランドを第二の日本にしよう。我々は第二の日本になりたい。普通の日本の市民が体験している明るさ、自由、豊かな暮らし、そういうものがポーランドにほしい。第二の日本をめざそう。」（ワレサ元大統領）

日本人を見倣え

日露戦争の勝利は、フィンランドやポーランドなどロシアの圧政に苦しむ国の人々に大きな衝撃を与え、民族国家独立闘争を激化させた。あるポーランドの作家は「日本に見倣え」と、次のように書いた。「日本人の愛国心は外国人への憎しみや軽蔑に根ざしたのではなく、周囲のもの全てに対する愛情に基づいている。命を犠牲にして任務を遂行する必要がある時、何千人もがその任務に志願するだろう。これがつい2年前にはヨーロッパ人に『猿』と呼ばれていたにもかかわらず、今は敵国からも尊敬を集めている国の姿である。尊敬されたいと思うなら日本人を手本として努力しなければならない。」

③ 第二の日本をめざせ

第二次世界大戦後、ポーランドはソ連の監視下で表現の自由を奪われていました。グダニスク造船所の電気工レフ・ヴァウエンスカ（ワレサ）は仲間を求むる運動の代表者として、1980年に自主管理組織「連帯」を創設しました。最初は食料品の値下げを訴える行動でしたが、や

運動は世界の共感を集め、1983年にワレサはノーベル平和賞を受賞します。1990年に行われた東欧初の自由選挙が行われ、彼はポーランド大統領に選出されました。大統領ワレサは社会主義政権下で立ち後れていたポーランドを復興させるため呼びかけました。「ポーランドを第二の日本にしよう。我々は第二の日本になりたい。普通の日本の市民が体験している明るさ、自由、豊かな暮らし、そういうものがポーランドにほしい。第二の日本をめざそう。」

日本の隣は……?

ポーランドには日本か、遠くには日本か、多岐にわたる人が日本を抱く。強い関心、誇りが抱く。経済的、感はきわめて精神的、面によるところが大きい。姿勢を見ても明らかです。彼等の親日感情の背景を探っていくと、忘れていたり知らなかつたりする自国の文化や伝統の価値に気がつき、今やポーランドにもアメリカ文化が急速に浸透し、生活がめざましく変わってきました。若い人たちがいまでも日本に強い関心を持ち続けているように、日本に強い関心は不明です。文化的・人的な豊かさ、気付け、この国の人が、時既にこの国の人が、冷めた日本への関心は、うなづいた。というように願うばかりです。この国でも多くの人々が日本を願っています。日本の隣は……?

